

ニジェール支所便り

2019年6月号

【編集長】小畑支所長 【編集担当】佐々木企画調査員

Tel: (227) 2073 5569 Fax: (227) 2073 2985 E-mail: ni_oso_rep@jica.go.jp

★ニジェール支所便りが JICA ニジェール支所の HP でも閲覧できるようになりました！懐かしのバックナンバーにもここからアクセスできます!! ⇒ <https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/index.html>

今月のトピック



- 支所からのひとこと ～ゆく人、くる人～
- 短期出張者が見たニジェール 中村公隆専門員 ～番外編:「直情」の巻～
- プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介
～みんなの学校:住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ 2～
～PASVA:農業普及システム改善プロジェクト～
- ニジェールにおける活動紹介
～ニジェールでゴミを集める日本人 第 19 話 ー都市文化のひずみ FAO(国連食糧農業機関)ローマシンポジウムに参加する～
- ニジェール国内の出来事 ～過酷なラマダン ー頻発する停電と断水で疲弊するニアメ住民～

支所からのひとこと ～ゆく人、くる人～

着任のご挨拶

新たに支所長を拝命した小畑永彦(おばた えいひこ)と申します。

JICA 北海道(札幌)での2年間の勤務の後、およそ 30 年ぶりに灼熱しかもラマダン中のニジェールの地を踏むことになり、とても充実した日々を過ごしています。これまでラバトやキンシャサにも勤務してきました。

若かりし 20 代後半のコートジボワール日本大使館勤務時代にはたびたび出張で来訪しましたが、当時ニジェールでは JICA 同期の天野真由美さんが協力隊調整員として卑弥呼のように絶大な存在感を放っており何かと助けてもらっていました。ウアラム農村復興計画やヤンタラ浄水場拡充計画、草の根無償での隊員活動支援などに関わり、私としては原点に戻ってきた思いです。

さらに、JICA ニジェール支所の朝は「ラジオ体操第1」から始まります！日中 40° になるが朝は涼しい首都ニアメの事務所の駐車場でニジェール人スタッフが率先して輪になり背伸びの運動をする姿は少し笑えますが、すばらしい習慣が根付いているものであり、私自身関節が思うように伸びない「老いるショック」にも気づかせてもらえました。

ニジェール愛に溢れた専門家の方々による「みんなの学校」「農業普及システム改善」などのプロジェクト、さらに地方行政能力強化による「平和と安定」への貢献などにも取り組んでいければと考えています。

これまで 3 年にわたり山形前所長が築かれたニジェール側との信頼関係を維持発展させられるよう、パワフルでフレンドリーな支所スタッフとともに頑張っていきたいと思っておりますのでよろしく願いいたします。な

お、「ニジェールの風物詩を見事にとらえた短歌」はハードル高いです(๑)



離任にあたって

この3年2か月強の間、支所便りで 30 首(句ではありません)、フェイスブック上でも 20 首の短歌(俳句でも川柳でもありません)を作ることができました。15 年ほど前の隣の国での赴任時に比べると、ずっと少ないにしても、また 1 月に 1 首は作らなければならないという宿題をもらったからと言っても、まずまずの成果でした。サヘル^マの風土が私に合っているからなのでしょう。熱帯雨林の国では、こうはいきませんでした。

と、業務に関係ない趣味の世界から書き始めて、すみません。だがどうやら、ニジェールは、一年のほとんどが暑くて厳しい気候でも、私の体と心に合っていたようです。それにも増して、ニジェール人の皆さんの素朴さ、誠実さ、勤勉さに魅せられました。もちろん、アフリカ諸国に多い効率の悪さという問題はここでも深刻ですが、人の気持ちの良さはそれを上回るものがあると感じます。

それだけに、隣から国境を越えてやってくるテロ攻撃が原因で、この国が危ないと見なされているのは、残念です。国内にニジェール人が主体となったテロ集団が見当たらないにもかかわらず、外国人が来訪を避けるというのは、理不尽ですね。ニアメから外に出て地方の風物を見ることがとうとうできなかつたのも、残念でした。

幸い、この国のこれからの発展の可能性を見いだせました。これからも応援したいという気になったし、今回の滞在を通じて日本にも同じ気持ちの友達が大量できたので、帰国後も、ニジェールと日本との関係を強くする活動を続けようと考えています。

皆さん、またお会いしましょう。

Sai wata rana.

Kala hanifo.

熱い風品々の色人々の喧騒を去る別離の市場^{マルシェ}

山形 茂生



ナショナルスタッフから送られた民族衣装に身を包み、家族のようなナショナルスタッフに囲まれて笑顔の山形所長

短期出張者が見たニジェール！

3, 4 月号の連載で、すっかり中村専門員の虜になってしまった方も多いのではないのでしょうか？さて、そんな皆さんの熱い要望にお応えして、前回ニジェールの地に再び降り立った中村専門員に(半ば強制的に)原稿をお願いしたところ、またまた太っ腹に来月分まで原稿を執筆頂きましたぁ！殺人的な出張日程の中、『支所便り』のために尽力していただき、感謝です！！

番外編:「直情」の巻



突然ですが皆さん、人前でカノジョのことバカにされたことがあります？！
もうそんな気分なんすよね。とりあえず以下、ある雑誌の抜粋します(著作権? カタイこと言わないで編集長。社内秘扱いで)。

(「スクリーン」2018年1月号より)

「SW40th 伝説は受け継がれる - 『スター・ウォーズ』はなぜ偉大なのか? ココがスゴイ① 興行収入の合計は国家予算並み!

シリーズ1作目から『ログ・ワン/スター・ウォーズ・ストーリー』まで含めた計8作の世界興行収入を合計すると、74億3835万ドル。日本円に換算すると8000億円以上というからびっくり! この数字は一国のGDP

(年間の国内総生産)にも匹敵する。ちなみに 2016年の統計ではアフリカの **ニジェール**

が 74億9200万ドル。(以下略)

スター・ウォーズ、皆さんご存知ですね。必ず最初に「昔々、遠い銀河で、、、」と字幕の直後「うぁん!!!」と心臓に悪い大音量の音楽、ライトセーバーやら、フォースの暗黒面やら、ベイダー出てきて「コー、ホー」のやつです(はい、筋金入りSWオタクっす)。小学3年の頃からリアルタイムのガチで観てきました、もう40年以上。なんせ新作が出るとなると数か月前からさながら小学生の夏休み前カウントダウン状態に昂るのですが、その最新作(2017年12月公開『最後のジェダイ』)の宣伝の惹句がよりによってこれかよ。「ちなみに」でニジェール使うかよ! ひきあいニジェール使うのってやっぱ、やっぱあ? (弱)、やっぱっ(泣)こんなシチュエーションでかよ(怒)。つか記者、お、見出しと本文で国家予算とGDP取り違えてね? 大違いだよ。アフリカで国家予算なんてだいたいどの国もカツカツでさあ(涙)そのうえ積み上げて承認されたつーのに全然支出されないんだけど(涙)GDPってこいつも数字かなりいい加減だけどフツー国家予算より全然上じゃね? って、あれ??? でもかえってそれって国民一丸で頑張っても「スター・ウォーズ」に勝てないってこと?

いや、待て、9200ひく3835だから、なんだ **まだニジェールが5365万ドル分**

勝つとるやんけ!!! よかったよかった! (でもその後、新作とスピンオフが相次いで公開されたから結局負けてんのか? 殺!)

、、、失礼しました。あまりに愛してやまないものにこれまた愛してやまないものが踏みつけられた気がしました。休日近所の図書館でゆるっと映画雑誌のバックナンバーをチェックしてただけだったのに血圧あがりました(薬飲んでるのに)。

ニジェールのみなさんっ! 当面はシリーズ2個分、いやまずはスピンオフ2本分くらいのGDP増量から狙ってみましょうよ。「銀河に最も近い」ニジェール、ある意味スケールはでかいぞ! ステップ・バイ・ステップで帝国に逆襲だぜ!!

(ルーカス、もう新作作んなよ。あ、JJか)



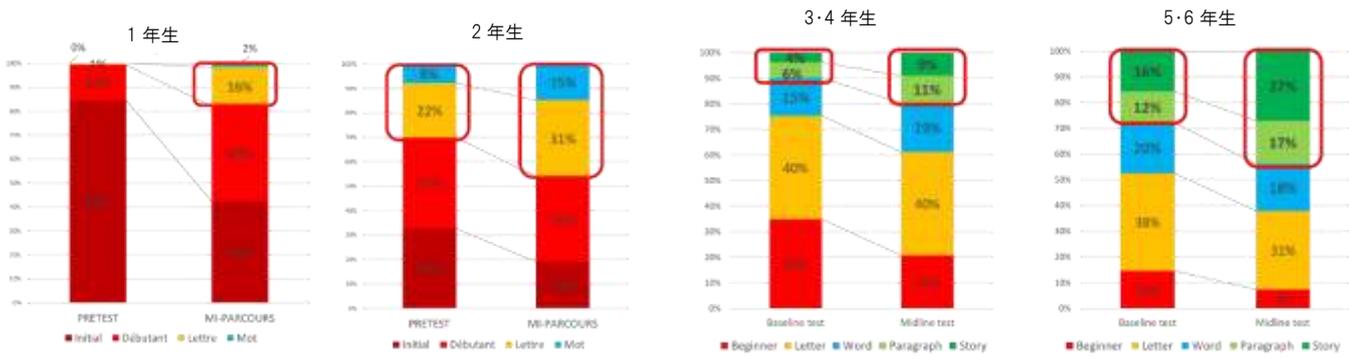
プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介

■ ■ ■ みんなの学校:住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ 2 ■ ■ ■

『みんなの学校:住民参加による教育開発プロジェクトフェーズ 2』では、初等教育分野と中等教育分野、二つの分野にて活動しています。初等教育分野においては、住民支援の校外学習に効果的なツールを導入することですべての児童の“読み書き”と“計算”の基礎学力改善を目指す『質のミニマムパッケージ』の開発と普及に取り組み、中等教育分野においては、アクセス、格差解消、教育の質の改善など、様々な教育開発課題の改善に貢献する“機能する”学校運営委員会(COGES)モデルの全国普及を進めています。

「初等教育分野」では、児童の能動的な習熟度別学習法(Teaching at the Right Level:TaRL)と算数ドリルを組み合わせた「質のミニマムパッケージ」読み書き・算数活動が、対象 101 校の 1 年生から 6 年生約 13000 名の児童を対象に日々実施されています。2 月に開始したこの活動ですが、1 カ月目にはすでに現場の教員やファシリテーターから“子どもたちの読み書き・算数の学力が上がった”との声上がるなど、上々の評判です。そこで、その真偽を見るため、開始から 1 カ月～1 カ月後の 3～4 月に、児童の学力状況の伸びを測るミッドライン学力テストを実施しました。その結果はというと、短期間でありながら、すべての学年で、読み書き・算数ともに向上が見られるという嬉しいものでした。

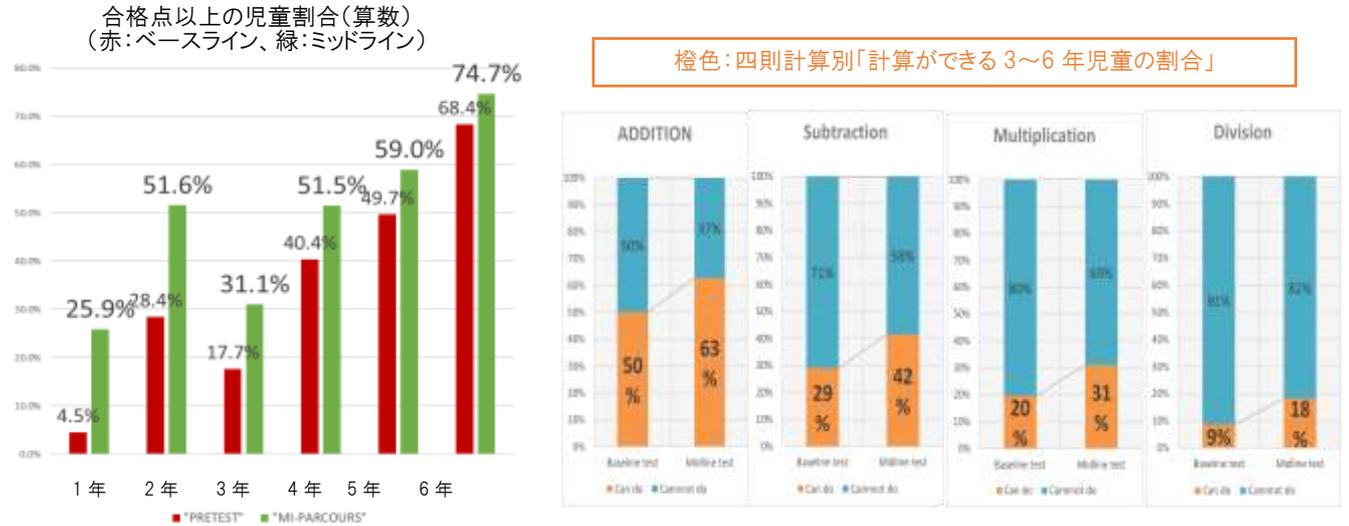
読み書きにおいては、当初 1 年生の 1%しかアルファベット文字を読める子はいませんでした。1 カ月後にはその数は 18%にまで上昇しました。2 年生ではその数は約半数にまで上っています。また、当初、3～4 年生で簡単な文を読める子は 10%、5～6 年生でも 28%程度でしたが、今回その割合はそれぞれ 20%、44%まで改善しました。



赤枠: 文字が読める児童の割合

赤枠: 文が読める児童の割合

算数においても、特に 1～2 年生で数字が読めるようになった子どもが大幅に増えたのみならず、四則計算問題で合格点に達する子どもの割合が、10～20 ポイント以上の上昇がみられ、計算力の向上も伺えます。



『子どもたちみんなが読み書き計算ができるようになる』には、まだまだもうひと踏ん張り必要ですが、今後に期待できる結果といえます。今後も、6月の活動終了へ向けて、引き続きコミュニティへのサポートを続けていくとともに、より効果的なモデルの開発・改善へと努めていきます。

(みんなの学校プロジェクト専門家 影山晃子)

写真右：「質のミニマムパッケージ」読みの学カテスト様子
読みのテストでは児童一人一人と対面式でテストを行います。



■■ PASVA: 農業普及システム改善プロジェクト ■■■

先月号に続き、今月新たにニジェル入りした PASVA 専門家の方々をご紹介します！

農業普及システム改善プロジェクト(PASVA)で、“臨時”業務調整役を務めますアイ・シー・ネットの三浦浩子です。“臨時”とついているのは、本来このポストにはいる者が日本で怪我をしてしまい、泣く泣く今回のみ私にそのポストを譲ったからです。なぜ、彼女は泣いていたかという、ニジェル JOCV の OG であり、久しぶりの里帰りを心待ちにしていたのに、アッラーの神から「待った！」がかかってしまったためです。小川さん、早く治して、戻ってきてください。

私はニジェルの経験は豊富ですが、農業は全くわかりません。ですので、プロジェクトの話ではなく、ニジェルの話を。題して「何が変わったニジェルこの 30 余年」。最初にニジェルに来たのが、1985~87 年で、次が 2004 年、そして 2008~2010 年、そして今回。85 年から 2008 年は、ほとんど変化が感じられず、「町の中のラクダの数が減った」、「女性がベールをかぶるようになった」、「砂漠に行けなくなった」ぐらいでしたが、2010 年から今回の変化は、「えーーーー！！！」という感じでした。ニアメの街が変わっちゃってる。「どっからこんな投資が来ているんだ?!」、「ちゃんとメンテできるのか?!」と心配になるぐらいの変わりよう。しかし、やっぱり、ニジェル、人々のスピードはまったりしていて、EcoBank の行員の作業効率もセネガルの半分くらい、ラマダンのせいもありますが、午後になると誰もいなくなる事務所も相変わらず。ちょっと安心しました。結論として、「インフラは大きく変わりつつあるが、もしかして、人間がついていけてないんじゃないの、ニジェル」というところでしょうか。あ、PASVA もよろしく願いいたします！



気が付けばニジェルは 11 年ぶりになります。その間ほとんどの年月をセネガル他西アフリカ諸国で過ごしてきました。久しぶりのニアメは町中工事中といった印象で、正直あまり変わったなという印象は持ちませんでした。久しぶりということもあり、早速、街中に散歩に出てみて中国系の人々や店舗が目立つなか、子供たちの人懐っこさや路上の物売りの人々の素朴な対応は、少しほっとするものがありました。丁度雨期が始まったばかりですが、農業を営む人たちの生活は相変わらず厳しい状況と聞いております。私自身も農家の出ということもあり、生産者の視点に立った活動で少しでもお役に立ちたいと思います。今回の活動では市場志向型農業に視点を置いた SHEP という農業アプローチを進めてまいります。

PASVA 園芸栽培1 後藤雅哉



今回もニジェルに大変所縁のあるお二人が赴任され、支所としても心強い限りです。酷暑とラマダン月が重なる大変な時期の渡航となりましたが、皆さん健康と安全に留意しながら、カウンターパートの方々と力を合わせて頑張してほしいと思います(Y.S.)。

ローマシンポジウムに参加する～

支所便り 7 月号(2016)から不定期でお届けしている、京都大学アフリカ地域研究資料センター・大山修一准教授の～ニジェールでゴミを集める日本人～シリーズ第 19 話。今回は、FAO 本部で開催された国際シンポジウムについて執筆頂きました。

2019 年 5 月 15 日から 17 日まで、国連食糧農業機関のローマ本部で開催された土壌侵食シンポジウム 2019 (GSER19 Global Symposium on Soil Erosion) に参加しました。参加者は 500 人以上、発表件数はキーノート・スピーカー、招待講演者、口頭発表、ポスター発表をふくめて 150 件ほどの大きな国際シンポジウムであった。わたしにとって、国連の会議に参加するのは、初めての経験でした。

このシンポジウムの趣旨として、YouTube にわかりやすいアニメーション (2 分 12 秒、英語) がインターネットにアップされています。その内容は、以下のとおりである。

地球上では毎 5 秒ごとにサッカー場 1 つ分の土壌侵食が引き起こされ、雨や風、農業によって進み、もっとも肥沃な表層土壌を流出しています。土壌侵食によって、食料生産が影響を受け、生産される農産物の量・質ともに劣化します。食料生産は今後、50%にまで低下すると懸念されています。土壌侵食を受けた土地は水を受けつけず、雨水が洪水や斜面崩壊、地すべりを引き起こします。風で飛ばされる砂は人間の健康被害を引き起こし、地中に存在する重金属が露出し、土壌汚染を引き起こします。

土壌は炭素の貯蔵庫ですが、表層土壌の流出により、炭素が二酸化炭素として放出され、気候変動にも影響を及ぼすほか、土壌がなくなるため気候変動の影響も受けやすくなります。土壌中には多くの生物が生息していますが、その多様性も失われることとなります。自然界が厚さ 2-3cm の土壌を作るのに 1000 年もかかったといいますが、われわれ人類は急速なスピードで土壌を失っています。

(<https://www.youtube.com/watch?v=MSbbl5lpmik>)

この土壌侵食の重要性を認識し、その対処を考えるというのが、シンポジウムの趣旨であった。わたしも、「サヘルにおける土壌侵食から土壌の堆積へ：都市の有機ゴミのリサイクルと土壌侵食地への投与」と題して発表をおこないました。土壌学を専門とする世界の研究者が、わたしの発表に、どのような反応を示すのかという興味がありました。



シンポジウムの様子
(Global Symposium on Soil Erosion, FAO 2019 年 5 月 15 日-17 日)

わたしの発表は、ニジェールにおける土壌侵食が飢餓や貧困を引き起こし、農耕民と牧畜民が武力衝突をしていること、大きな貧富の格差と貧困ゆえにテロが生じていること、そしてその解決のために、ニアメ市のゴミを使って緑化をし、人々の平穏な暮らしにつなげるという、これまで20年ちかい活動を紹介するものであった。聴衆からは、都市のゴミで土壌侵食を止め、緑化できることにショックを受けたというコメントを受け取り、大きな反響を受けたことについては光栄なことだと思っている。また、発表のなかではニアメ市のゴミの重金属や有害物質の分析結果も示したが、人間の出すゴミに対する有害性への懸念が根強いことも、改めて理解できた。

国連食糧農業機関のシンポジウムでは、学者が参加する国際学会とはちがいで、ワーキング・ドキュメントを作成するということをひとつの目的にしている。国連は各国の政策に介入することはできないが、このシンポジウムは科学者の知見をもとに提言を作ることが目的なのだ、わたしは参加途中で知った。わたしが参加したのは、セッション2「土壌侵食を止める政策」で、政策への提言を作成するという色合いが濃かった。このセッションは政策を議論するグループと、実践活動を議論するグループに分かれた。わたしは後者に属していました。

さまざまな国・地域の自然条件、政策の歴史、人口、市場へのアクセス、農業や牧畜の経済活動が異なり、フィールドにおけるデータの収集とデータベースの構築、現状を表現する再現モデルの構築の継続、地域・国家、グローバルに対応していくためのデータづくりと政策提言の重要性を確認するという、結論はまるまったものになった。土壌侵食に対する研究論文はこれまで膨大な数になるにもかかわらず、研究のための研究では、とても土壌侵食の解決に資することができないのではないかと訴える参加者もいたが、普遍性を求めなければならない結論としては予定調和的で限界を感じつつも、自然な流れだと思った。

この土壌侵食の会議がローマでおこなわれたというのも感慨ぶかい。日没が20時すぎということもあり、会議のお昼休みや終了後に、競技場であるコロッセオや水浴場のカラカラテルネ、トレヴィの泉などのローマの巨大な遺跡、バチカン市国のサンピエトロ大聖堂などを散策すると、長きにわたり文明の中心地として存続した都市の隆盛は周囲に住む人々が生産する農産物や労役、農民に対する重い課税によって成り立っていたことは容易に想像できる。

Food and Agriculture
Organization of the
United Nations

**STOP SOIL EROSION
SAVE OUR FUTURE**

**From Soil Erosion to Soil Accumulation:
Recycling Urban Organic Waste to the Eroded
Land in Sahel, West Africa**

Shuichi Oyama
(Centre for African Area Studies, Kyoto University)
Hitomi Kirikoshi
(Tokyo University of Foreign Studies)
Ibrahim Mammam
(Direction de la Meteorologie Nationale du Niger)

GLOBAL SYMPOSIUM ON SOIL EROSION
15-17 MAY 2019 | FAO - ROME, ITALY

itps IAEA UNICRI SPI Science-Policy Interfacio

発表スライド(共同発表者は、東京外国語大学の桐越仁美さんとニジェール気象局のイブラヒム・マンマンさん)。

過去も、現在も、都市は消費する場であるが、現代においても都市は生態系の物質循環のなかで、うまく位置づけがなされていないのが実情である。人類は農業や牧畜を通じて、土壌から自然のめぐみを得て、生存している。われわれは安全性と利便性、清潔さをもとめて衣食住をまかない、そしてゴミやし尿を出し、廃棄物を生み出す。地球上の人口 76 億人が出す廃棄物の量は、想像を超える量である。

この廃棄物は各都市である程度、分別されたあと、不要なもの、危険なものとして燃焼してコンパクトにして埋められるか、あるいは野積みにして隔離されている。つまり、われわれが安全性と清潔さ、利便をもとめる生産物は消費されたのち、その残骸である廃棄物には危険性と不潔さ、そして無用が強調され、うまく自然界に戻せていないのが実情である。ニジェールのわたしの活動が、世界各地で適用できるとはとても思えないが、人類—とくに都市を生態系のなかに位置づけることは今後の持続性を考えるうえで必要となろう。

土壌侵食の問題を理解するには、土壌侵食に関するデータの収集・蓄積、土壌や植物、気候、人間の経済活動など各種データで作られるモデルの構築、そして新しい材料・技術の導入実験などはとても重要であるが、現代における土壌侵食の問題はそれだけではとても解決しえないだろう。上記の YouTube の訴える、土壌侵食の問題は、軽快な動きのアニメーションに反して、非常に深刻な内容である。



5 万人の観衆を収容したという巨大な競技場 コロッセオ。



FAO 本部が排出するゴミの組成(FAO 本部)。

土壌侵食の問題はヨーロッパや北米、南米、オーストラリア、アフリカの各地で問題となっており、このシンポジウムに中・南米の研究者の参加が多かったのは、わたしには予想外であった。しかし、よくよく考えると納得できる。わたしが 2000 年から 10 年以上にわたり通いつづけたアンデス山脈では斜面の崩壊や土壌侵食は深刻であるし、ウルグアイやブラジルでは広大な森林の開墾と農地の造成により土壌が酷使され、大規模な土壌侵食が発生している。

わたしにとって、ひとつ残念だったことは、ニジェールだけでなく、サヘルを研究の対象とする発表者が、わたし以外にいなかったことである。ニジェールを対象としたポスター発表が 1 件あったが、その発表者はコートジボワールから会場に現れることはなかった。土壌学者は、複数の研究者とともにチームで研究を進めることが多い。現在でも、サヘルは土壌侵食や砂漠化のホット・スポットのひとつであるが、サヘルで研究する研究者とはネットワークを作ることにはかなわなかった。



ローマ市内の公園に散乱するゴミ(Piramide 地区)。

近年の治安・情勢の悪化で、サヘルにおける研究活動が衰退傾向にあるのかもしれない。研究は平和があってこそ、実施される。この傾向は当分、続くのだろうと思った。このシンポジウムには、多大な資金と労力、コストがかけられている。土壌侵食をテーマとした FAO シンポジウムが、土壌侵食に苦しむ地域やその住民とは関係ないかたちで、実績づくりに終止したり、あるいはローマ帝国で選ばれた者だけが集まった元老院のようになってはいけないということも痛感している。

土壌学を専門とする世界の研究者が、大山先生の発表に驚き、良くも悪くも大きなインパクトを与えたということは想像に難くありません。以前こちらで、大山先生が国際機関や大学、NGO 関係者を招いてセミナーを開催した際も同様の反応が見られましたし、ニジェールの環境省の役人にいたってはあからさまな拒否感を示したほどです(詳しくは 2017 年 4 月号をご参照ください)。その一方で、都市で排出される大量のゴミはニアメ郊外へ運ばれ、日々堆積していきます。「その残骸である廃棄物には危険性と不潔さ、そして無用が強調され、うまく自然界に戻せていないのが実情」。まさにこれがニアメの現実です。ゴミを悪の元凶とみなし、生活圏から遠ざけることはたやすいことですが、根本的な解決のためには、大山先生が指摘するように、ゴミをひっくるめた都市の生態系における位置づけについて考える必要があると思います。



ニジェール国内の出来事 ～過酷なラマダン頻発する停電と断水で疲弊するニアメ住民～

5 月 6 日から始まったラマダンも、早いものでもう 20 日が過ぎようとしています。酷暑の最中の断食に体は幾分慣れたような気がしますが、それも空調の利いた事務所にいれば、の話。日中屋外へでようものなら、瞬く間に体内の水分が奪われ、結果体力、気力まで削ぎ取られてしまいます。恐るべしニジェールの太陽。それに拍車をかけるように、頻発する停電と、地区によっては長時間の断水でニアメ住民は日々疲弊していきます。人々を苛立たせるのは、停電や断水に対して、その責任者である電力公社(NIGELEC)、あるいは水道局(SEEN)が満足いく説明をしていないこと。

さて、右の記事は、ある地元紙に掲載されたものですが、これが SNS 上でも引用され、「NIGELEC の社長なら、数年間は頭を下げ続ける必要があるだろう」と揶揄する投稿も散見されます。こんなところで日本の謝罪風景が取り沙汰されるとは... 日本人としてはちょっと複雑な心境ではありますが、一ニアメ住人として、彼らのぶつけどころのない苛立ちや怒りは十分に理解できます(これが暴動に発展しないのが、平和を愛するニジェール人のなせる業で

しょう)。世のイスラム教徒にとって最も神聖な時期にあたるラマダン月。人々のライフラインでもある電気と水が遮断されては、おちおち祈りも捧げられない、というのが実情かもしれません。数年間頭を下げろとは言いませんが、せめてラマダンの終盤の日々は、皆が心穏やかに、快適に過ごせるよう尽力してほしいと思います(Y.S)



Source du savoir
Le ministre de l'énergie japonais est resté incliné devant son peuple pendant 20 min, à cause d'une coupure d'électricité qui a duré 20min, dans une petite ville au Japon.

ある地元紙で紹介された日本の大臣の停電に対する謝罪写真:「20 分の停電で 20 分間頭を下げる」と記されています。